

『メディアの伝える外国イメージ』

川 竹 和 夫・杉 山 明 子 編著

マスメディアを経由する国際的な情報の流れは、一九七八年ユネスコの『マスメディア宣言』、さらにこれを受けた『マクフライド報告』などで、その一方通行性、内容的な偏りの問題が指摘されて以来、その状況には改善のあとが見えない。マスメディア市場は、今も欧米のメディアに支配されていて、欧米の価値観にもとづいた情報が世界に流通している。国際ニュース通信社、テレビ映像通信社、グローバル規模のテレビニュース放送事業など、すべて欧米を起点としており、映画。テレビ番組に至っては、アメリカ・ハリウッドのヘゲモニー体制が続いている。この分野では、ヨーロッパ・カナダなどの諸国も、アメリカ文化の支配圏にあり、それぞれ、「自国文化のアイデンティティ」を守るべく、輸入に対する障壁を設ける政策をとっていることは周知のところである。

最近、飛躍的に伸びているインターネット市場も同様と見ていいだろう。

こういう状況の中で、情報先進国である日本は、マスメディアの国際情報に関しては、いまだに途上国であり、ほとんどのメディアで欧米情報の受信国であり、また、国際市場に参入できないでいる。アジアでも、テレビ衛星放送の発信基地は、香港・シンガポールであって、

日本はその圏内の極地に留まっている。

歴史的経過からそうなっている面もあるが、日本のメディアに情報発信意欲がすくなくとも要因と考えられる。例えば、日本発の「テレビ国際放送」をみると、NHKが現在、アメリカ・ヨーロッパ・アジア向けに一日五〜七時間の放送をしているが、日本語番組が中心で、しかも、財源の裏づけがないので、将来情報発信チャンネルとして伸びる可能性は少ない。英BBCは有料の「テレビ国際放送」を実施しているし、アメリカは、USIAの予算で、対外宣伝放送の「ワールドネット」を世界各方向向けに放送している。

一九九六年の放送法改正で、民放テレビ局も海外放送ができるようになったが、まだ実施はゼロ。海外での活動としては、わずかに住友商事の運営する、シンガポール発のJET（娯楽番組中心に四カ国語で放送）があるだけという状況である。

日本からの発信が少ないということは、日本の国際的発言力の弱さにもつながり、同時に、日本への認識の不足にもつながる。日本・日本人のイメージは、外国のメディアの手によって、彼らの先入観に基づいて形作られるおそれが多分にある。

私たちの研究グループ「ITFP-JAPAN（国際テレビ番組フロア研究日本プロジェクト）」の問題意識はそこにある。そもそもITFP-JAPANなるグループをつくったのは一九七八年で、IIC（世界放送通信機構本部ロンドン）の要請に基づいて、前述のような、「情報の国際フロー」の状況を、日本を中心に、具体的な統計数字と実例によって調査しようというのが、その動機であった。そして、

その作業を続ける中で、各国のメディア研究者たちとの交流が始まり、彼らの関心に合わせて「メディアの中の外国情報」がもたらす外国イメージのステレオタイプについても、いくつかの国で実験調査を進めるといった結果になった次第である。

私たちのグループでは、これまでに、『日本を中心とするテレビ情報の流出入』について二回（一九八〇年・一九九三年）、『日本と外国とのメディアが形成する外国イメージのステレオタイプ』について六回（八カ国）の調査を行い、現在、さらに三カ国を加えた一一カ国対象の共同調査が進行中である。

今回、紹介させて頂く『メディアの伝える外国イメージ』（圭文社）は、過去に行った前述の調査研究の結果の中間報告的なもので、それに、ジャーナリスティックな関心事（阪神大震災・皇太子ご成婚・戦後五〇年・日韓関係など）についての国際報道の分析結果の各担当者による報告を付け加えたものである。以下主要項目について、そのエッセンスのみを紹介する。

◎日本を中心とするテレビ情報の流れ：「日本はテレビ輸入の比率がきわめて低い（5・2%）」「しかし国産番組・CMなど外国情報が氾濫している。その中心はアメリカである」「外国向けテレビ番組の輸出は飛躍的に増えたが、その大半はアニメで、その暴力度に対する批判が各地で続いている」「テレビニュースの日米比較では、日本の中のアメリカが圧倒的に多く、アジアとの比較では、日本からのニュースが多くなる」

◎マスメディアにあらわれる外国イメージのステレオタイプ……

「どの国でも、外国情報入手にもっとも大きい力をもっているのはテレビである」「テレビの伝える外国情報は、対象国ごとにインバランスがあるが、特に情報過疎の国の場合センセーショナル報道に限定され、ネガティブなイメージをつくる」「フィクション番組に現れる外国・外国人は限定的なステレオタイプをつくっている」「メディアの外国イメージと、市民が抱いている外国ステレオタイプの間には相関がある」「各国とも、自分の抱いている「外国イメージ」について真実感を持ち、外国のメディアの伝える「自画像」には不信感がある」

この他の項目、「テレビCMにおける外国要素の役割」「日米テレビ報道比較」「外国製作番組に対する日本人の態度」などでも、いずれも日本のメディア（特にテレビ）の、番組編成・ニュース編集が、アメリカ偏重でアジア軽視であることが示されている。

また、巻末の『日本・フィンランド比較調査』では、フィンランド側が、いかに親日的であり、日本に対する知識があるか。それに対して、日本の側はいかに、フィンランドに関して無知・無関心であるかが浮き彫りにされる。この中で紹介したフィンランドの少女（小6）の日本についての作文で、彼女は日本の社会・文化・技術について（多少誤解もあるが）詳細な知識を披露し、「日本に学ぼう」と提唱している。私たちは、これに応える必要があると痛感した。

日本のメディアの国際感覚・ひいては日本人の国際性の問題について、私たちはこれまでの調査研究を通じて、考えさせられるところがある。いろいろあった。しかし、実証的で、統計数字中心の研究結果から、そういう問題点の存在を読み取っていただけられるかどうか、あまり自信

がない。

川竹和夫・杉山明子編著『メディアの伝える外国イメージ』

圭文社刊（一九九六年三月）

A5判 二九八頁

二、〇〇〇円